

平城京四重奏

他、一篇……地霊

藤首
亮
著

歴史物語

平城京四重奏

この物語の中で、不比等に「後の世の人如何に考えむ？」と言わしめた。
国破れてすでに、半世紀を超えたが、外敵の蹂躪に民族の魂は抹殺されたまま、未だ蘇っていない。
日本書紀を手にして、この国の成り立ちに想いを致さねばならない。
そして今、不比等の問いに応えねばならない。

(序文より抜粋)

平城京四重奏

他、一篇……地霊

藤首とうあびと

亮りょう

著

目次

歴史物語
平城京四重奏

序文

………4

乙巳の変・飛鳥板蓋宮夏

《西紀 六四五年》

………6

七十年後・夏

《七二五》

………12

平城京・冬の四日間

《七二六》

………17

養老年・麻呂の死

《七二七》

………40

巨星墜つ・史の死

《七二〇》

………44

長屋王・或る日、突然に

《七二九》

………45

藤原四卿・ひと夏の出来事

《七三七》

………46

地 霊

藤原広嗣・挙兵への道	………	47
西海に散る	《七三八〇》	54
三十年の後・天武皇統 終焉	《七七〇》	56
後書	………	57
横須賀	………	59
波奈之丸 なみなしまる	………	60
北鎌倉	………	71
伊勢左木町	………	79
		80

平城京四重奏

・序文

この物語の中で、不比等に「後の世の人如何に考えむ？」と言わしめた。

国破れてすでに、半世紀を超えたが、外敵の蹂躪に民族の魂は抹殺されたまま、未だ蘇っていない。

日本書紀を手にして、この国の成り立ちに想いを致さねばならない。

そして今、不比等の問いに応えねばならない。

世界帝国・大唐 先進文化国家・新羅・百済・高句麗に比肩する国家として、日本の外観が形成されたのは、奈良に新都が建設された時代である。 左大臣石上朝臣麻呂と右大臣藤原朝臣不比等に権力が集中し、二人が一体となって総指揮を採った時代でもある。国の基本を天皇中心とする形とし、儒教・佛教を重点としながら学問・文化を興隆させ、律令制・官僚制という朝廷政治制度を定め確立した。

千三百年の時の流れの中に、平城京はあとかたもなく廢墟となり地上から姿形を消し去ったが、麻呂と不比等は歴史の上に生きているのである。

乙巳の変【西暦六四五】年、飛鳥板蓋宮で蘇我入鹿が中大兄皇子の手により殺戮された。日本の国家形成の原初となる政治事変【大化改新】とも言う。

左大臣石上麻呂はこのとき六歳であったが、物部宗家の嫡子の子として武器を握られ死を覚悟した。甘樫の丘が火炎に包まれるのを記憶していたが、右大臣藤原不比等はそれから十三年後に遅れて生まれたのだった。

白村江の戦い、麻呂は参戦したが不比等は未だ三歳の赤子だった。

壬申の乱 不比等は十四歳の少年であったが、一族の氏上の中臣連金が右大臣であり、乱後に斬首され不比等の立場は微妙だった。

麻呂は友友皇子の死の最期を唯一人で看取り、御首を抱いて皇位纂奪を目論む大海人皇子の面前に立ったのである。

国家存亡の危機の時代に、十九歳遅れて生まれて来たという事は、生涯どうしても越える事の出来ない、二人の上下関係だった。

二十年前、同時に大納言になったが麻呂が上席であった。そして今、不比等は麻呂の下位の右大臣だった。麻呂がちょうど還暦を迎えた年のことだった。藤原京を捨て平城京に遷都する際に、天皇の次の位に座る左大臣の麻呂が旧都の留守という閑職を勤めた。

不比等の専横を陰でなじる声も上がっていたが、麻呂は全く意に介する風が見えなかった。新都で今後行われる様々な改革に、自分は介入しないで、不比等に思う存分の力を発揮させようと決意していたのだった。遷都の栄光を自分の次席である不比等に独占させた。麻呂の娘が不比等の三子馬養の妻となり広嗣・良継を生んでいた。

天武の皇統にどうしてか強健な男子の誕生が無く、元明・元正と女帝が二代皇位をつなぎ、不比等の孫首皇太子の成長の時を稼いでいた。

皇太子妃の安宿媛も不比等の娘であった。皇子の誕生を期待されていたのだが、未だにその兆しが無く、先々の皇位継承に不安があった。

養老元（七二七）年三月三日、長屋王邸の曲水の宴席で麻呂は七十八年の生を終えた。

不比等は三年後、日本書紀の完成を見届け、この世から消えた。六十三歳だった。

麻呂と不比等の後は聖武天皇の勅令すら撥ね返す力量の天武天皇の孫長屋王であった。

しかし八年後、何等の罪も無い左大臣長屋王は、権力奪還を目指す不比等の四子に殺害されてしまうのだった。

そして八年後の天平九（七三七）年、この藤原四子全員が突如として半年間で病死する。

藤原鎌足から不比等そして四子へと営々として築き上げてきた藤原氏の終焉と見えた。藤原復権を目指し過激に反政府活動を繰り返す不比等の孫・広嗣は太宰府に左遷される。そして広嗣は、藤原四家の総意を得られぬまゝ孤軍、九州で挙兵するが敗北し斬首された。

天平十二【七四〇】年十一月のことであった。広嗣は未だ、妻も子も無い二十代後半の

若き公達だった。

表題の四重奏について

* 鎌足く不比等く馬養く広嗣 この藤原氏四代を意味する。

* そして藤原四家**不比等の四人の息子** 南家・武知麻呂 北家・房前 式家・馬養 京家・麿

* 天皇家と結んで権力闘争をする藤原氏。およそ百年の栄枯盛衰の舞台を平城京に求める。

乙巳の変は最近書き加えた文章なのだが、平城遷都の七十年前の事件であり、時間差

が物語に空間・間隙を生じさせた。在ののと無いのでは、あったほうがよいと思に残すことにしたがどうも気になる。

蘇我入鹿の首を誰が切り取ったのか？は知られていない。そこで麻呂の父宇麻呂を登場させたのである。壬申の乱に敗北した大友皇子の最期にその首を落とす役割が【物部】

石上麻呂に委ねられる必然を描きたかったのである。

それでは何故麻呂に、皇子の首を斬らせたかったのかというと、大友皇子を死に迫いやり皇位を篡奪した負い目を持つ天武天皇【大海人】に対し、畏怖を抱かせる為にある。

物部氏がいつきまつている石上神宮の主祭神の布都御魂大神は、神武天皇の東征を助けた霊剣であり【物部】石上の嫡流である麻呂に大友の怨霊を封じる役目を果たさせようと天武天皇【大海人皇子】は考えた、と、言いたいのである。

麻呂が遺稿に記述しているように、晩年の天武天皇は大友皇子の怨霊に苦悩していた。皇后持統、太政大臣・武市皇子、以下天武皇統に繋がる皇族はすべて麻呂の霊力にある種の恐れを抱いていた。当時の平均寿命が四十歳といわれる中であつて、七十八歳で死するまで、左大臣の不動の地位を保ちえた理由はここにあつた、と、言いたいのである。

不比等は十六年ぶりとなる遣唐使船を過去七回の二艘から四艘に倍加し五百五十人の陣容で派遣することにした。二十二歳の馬養を従五位下に昇叙させ副使に任じた。

十数年の後勲学を終え帰国する予定の留学生に莫大な金銀財貨を与え特別な任務を課した。それは、貴重文書的大量輸入命令だった。

おわり

乙巳の変

やるな《蘇我入鹿を討つ》と、直感したその決め手の一つには……

佐伯子麻呂と葛城稚大養網田の二人の姿を、中大兄皇子の身边で見た、と、言う、最近の報告が複数あつたからである。

佐伯氏と葛城氏は古の強勢が嘘のごとくに衰微しており、その枝流の末孫で唯単なる武人の若者が、皇后の第一子に近侍するのは極めて不自然な姿であつた。そのこととあわせて、二人が連れだち門を出入りする挙動にも、どこか以前とは異なる怪しげな雰囲気を感じ、宇摩乃は同族の手の者に二人の身边を洗わせていた。飛鳥板蓋宮(六四三)に遷る

前の飛鳥岡本宮(舒明朝)での十年を合わせ、今日まで十一年間に亘り、物部氏の嫡孫物部連宇摩乃は宮廷の軍事・警察の長官職にあつた。

突如として中大兄皇子が現れて、自ら宮門閉鎖を命じた。

同じ日に高麗・百濟・新羅の三国が貢ぎを奉る事は異例であ

る。守門を厳重にすることの指示は妥当だが、事前通告は何等無く、警備の人員は通常配置である。そして皇子は、かかる事態の最中に、禄を給うから宮土府を一所に召し集める、と、言う。

中大兄皇子の言辞に深い疑惑を抱いたが、

《入鹿を逃がしてはならぬ》

と、宇摩乃は瞬時に決断した。

そして十二の通門の衛士府に

【たとえ大臣と言えど、固く門を閉ざし阻止せよ。若し、太刀を抜きたれば躊躇せず射殺せよ。違命者は罰せられ、類は親族に及ぶべし。各員奮励己の責務を果たせ】
と、驚愕すべき内容の指令を発した。

雨滴を頬に感じた宇摩乃は、衛舎に入り小刀を握り締めると、木簡を無心に何枚も削つた。

猛然、太刀を振るう入鹿と、書き、文字を眺めた。

曾祖父尾興、祖父大市御狩、祖父の弟守屋、父目、三代およそ九十年に亘る宿敵の蘇我に抱き続けて来た闘志が、こんこんと五体に心地よく充満して来た。桧皮板の屋根を激しく叩く雨音が、恰も乱入する蘇我の護衛の叫び声の如くに聞こえた。宇摩乃は立ち上がり、強弓を執り二十本の矢の入った鞆(ユキ)を背に負い外に出た。空耳ではなかった。

正門に古人大兄皇子が大声を出し暴れていた。

宇摩乃は弓に矢を番え

「しずまれ」と、恫喝し、歩み寄った。

蘇我氏が次期皇位に推戴するのは古人大兄皇子である。

その皇子が冠も失い履も脱げ独りで錯乱して居る姿を目撃し、予感的中を確認した。遠巻きに怯え逃げ腰の衛士に向かい

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。